

第二章 交通及通信 第一節 交通

第一項 海運

北清航路ハ解氷及ビ結氷ノ二期ニ於テ最モ繁忙ヲ極メ夏期ニハ比較的貨物少ナク加フルニ天津牛莊等ハ冬期ニ至レバ結氷ノ為メ航海社絶スル等ノ不便アルヲ以テ郵船會社大坂商船會社及東亞汽船會社ガ定期航路ヲ繼續スル外ハ何レモ不定期船ニシテハシブルガアメリカラインノ上海青島芝罘天津線ノ如キモ定期船ト稱スルモ前記三會社船ノ如ク規則正シク航行スルモ

在芝罘日本領事館

ノニアラズシテ寧口不定期航路ニ近キモノト謂フベク尚ホ當港ヲ根據トシテ北清沿岸ノ航業ニ從事スル本邦船ハ謂フニ及ハズ上海ヲ起點トシテ北清各港間ヲ往復スルニ大汽船會社怡和洋行(インド・チャイナ・スチーム・ナビゲーション・カンパニー)代理店太古洋行(チャイナ・スチーム・ナビゲーション・カンパニー)代理店招商局ノ如キニ至テモ貨物集散ノ状況及航海ノ時期ニヨリテ船線ヲ行ヒ若シ或航路ニシテ開散ナレバ其航路ニ使用ノ船舶ヲ引揚ケテ他ノ繁忙ナル方面ニ廻航セシムルヲ常トス之ヲ要スルニ北清ノ

海 306

海灣ハ毎年十一月月中旬ヨリ翌年ノ三月下旬迄ハ北風強ク波浪高クシテ停船數日ニ亘ルコト珍ラシカラザルニヨリ定期航海ヲ爲サントスルモ事實上行ヒ能ハザル長キヤリテ若使用船數及船名等モ常ニ一定スルコトナシ

一、開港場船舶

△第一芝罘ニ於ケル海運ノ狀況

明治三十八年中當芝罘港ト外國及清國諸開港場間ノ往復セル船舶數ハ入港二千九十五隻、百七十四万九千九百三十九隻、出港二千九十九隻、百七十五万九百三十九隻ニシテ之ヲ三十七年ニ比較スルニ出港ニ於テ二百五十三隻、二百五十六千五百十七隻、入港ニ於テ二百七十一隻、二百六万四千三百十四隻ヲ増加セリ

在芝罘日本領事館

出入港船舶國籍別表

流 船

年次	明治三十八年				明治三十七年			
	國籍	入港	出港	在港	國籍	入港	出港	在港
英國	七、一、三、四、五、〇、九、四	七、〇	八、四、一、五、六	八、〇、八、三、〇、一、五、九	八、〇、九、八、三、〇、一、五、一	八、〇、九、八、三、〇、一、五、一	八、〇、九、八、三、〇、一、五、一	八、〇、九、八、三、〇、一、五、一
米國	二、三、八、二、〇、九、六、五	二、〇	二、三、八、二、〇、九、六	二、二、九、五、一	二、二、九、五、一	二、二、九、五、一	二、二、九、五、一	二、二、九、五、一
獨逸	二、三、八、二、〇、九、六、五	二、三、八	二、三、八、二、〇、九、六	二、四、六、一、八、一、〇、六、九	二、四、五、一、八、〇、九、三、四	二、四、五、一、八、〇、九、三、四	二、四、五、一、八、〇、九、三、四	二、四、五、一、八、〇、九、三、四
伊國	四	二、二、〇、四	五	三、一、八、七	一、八	一、四、六、〇、六	一、七	一、三、六、二、二
那威	二、七、二、三、四、〇、七、〇、三	二、七、二、三、四、〇、七、〇、三	二、七、二、三、四、〇、七、〇、三	九、四	八、〇、八、四、三	九、一	七、七、六、七、〇	七、七、六、七、〇

海 307

年次	入港船隻		出港船隻		在芝罘日本領事館	總計	日本	英國	清國	韓國	日本	露國	瑞典
	隻	噸	隻	噸									
明治二十九年	1,250	1,131,625	1,249	1,130,753		2,099,550	505	2,099,550	2,099,550	2,099,550	2,099,550	2,099,550	2,099,550
三十一年	1,280	1,184,976	1,380	1,185,671		2,099,550	505	2,099,550	2,099,550	2,099,550	2,099,550	2,099,550	2,099,550
三十二年	1,269	1,152,355	1,377	1,150,014		2,099,550	505	2,099,550	2,099,550	2,099,550	2,099,550	2,099,550	2,099,550
三十二年	1,614	1,346,092	1,613	1,347,376		2,099,550	505	2,099,550	2,099,550	2,099,550	2,099,550	2,099,550	2,099,550

芝罘港の出入船隻は、戦後、減少の傾向を示し、戦前と比較して、減少の顕著な傾向を示す。戦前、戦中、戦後の各年、芝罘港の出入船隻の数は、戦前と比較して、減少の傾向を示す。戦前、戦中、戦後の各年、芝罘港の出入船隻の数は、戦前と比較して、減少の傾向を示す。

海 308

年次	入港船隻数		出港船隻数	
	隻	噸	隻	噸
明治三十二年	一九	二,四八四	二〇	二,一九三三
明治三十一年	二七	八,〇二七	一四	六,六二七
明治三十年	二二	八,三九九	一五	九,六八九
明治二十九年	一五	一,一〇四八	一五	一,一〇四八
明治二十八年	六	七,九二八	六	七,九二八
明治三十四年	四	三,一〇〇	四	三,一〇〇
明治三十五年	二	二,一四八	二	二,一四八
明治三十六年	一	二,〇七九	一	二,〇七九
明治三十七年	四	二,一六五	二	二,一五八
明治三十八年	六	六,八〇〇	八	六,八〇九

在芝罘日本領事館

芝罘ノ根據トシテ來往スル内港ノ重
 ナルモノハ山東省ニ於テハ登州龍口
 虎頭崖羊角溝等ニシテ對岸盛京省ニ
 アツテハ安東縣、大孤山、沙河、皮子窩等
 トス而シテ昨三十八年中是等船隻ノ
 芝罘ニ出入セルモノハ入港三百三十
 八隻、十一万九千二百四噸、出港三百三

海 309

年次	明治三十八年		明治三十七年	
	隻数	噸数	隻数	噸数
計	三二八	二九三〇四	八三	二五、三七八
英國	四〇	八、六五四	五	五、六七
獨逸	一	一	四	五、四〇
那威	一	一	二	一、三三四
日本	二二五	六、四九六	一六	二、七九
清國	五九	二、〇五四	四六	一、三二八
計	三二八	二九三〇四	八三	二五、三七八

内港航行船隻比較表

年次	隻数	噸数
明治三十八年	一七	五、三七二
明治三十七年	一〇七	二、六八七
明治三十四年	四一五	一一、五七四

在芝罘日本領事館

則リ利用セリヨリ當港ノ如キハ最モ該規
 十七年中ハ日露戦後ノ影響ヲ受テ
 ト多ク蓄シキ減退ヲ示セルハ又止リ
 得ガハモ之ヲ大体上ヨリ觀察スル
 キハ當港ニ於テハ内港航行船舶數
 ハ開港場経緯船舶ト同ジク年々發達
 ノ状態ニヨリト云フヤシ

十九隻十一万九千三百三噸ニシテ
 邦船其第一位ヲ占メ清國船及英國
 船之ニ次ケリ

海 310

出入港名		入港	出港
滿洲諸港		一、九四二	一、一六三
直隸諸港		四六五	三〇六
山東諸港		三〇六一	三、四八五
江蘇省諸港		三九五	一、八四

年	民船	噸數	噸數
三十三五年	二九六	一〇九、三六一	二九八
三十三六年	三〇五	九、四〇九	三〇六
三十三七年	八三	三、七七九	八三
三十三八年	三三六	一、九、三〇四	三三九

數年前よりハ當地地方ニ於ケル沿岸貿易ノ大部分ハ民船即チ支那「ジヤンク」ニヨリテ行ハレシムルモ民船ハ風向ノ都合ニヨリテハ流船一日ノ行程ニ拾數日ヲ要スルガ如キコトナリテ往々商機ヲ逸スルコト少カラザルヲ以テ内港航行規程發布以來流船ニヨリテ貨物ノ輸送セラル、モノ次第ニ増加シ其結果當港ニ出入スル民船ハ近來大ニ其數ヲ減少シ其船價ノ如キモ二三年前ニ比シニ割方ノ低落ヲ來セリ而シテ昨三十八年ニ於ケル是等「ジヤンク」ノ出入港數ハ入港六千二百七十五隻、出港五千七百七十隻ニシテ其出入港名並ニ隻數左ノ如シ

在芝罘日本領事館

海 311

寧波	四	五	五
福建省諸港	九	六	七
韓國	二	七	一
四航路	六	七	五
北清	六	七	五
北清ニ於ケル各航路ハ夏期ト冬期ト			
ニヨリテ異ナリ一夏セズ次ニ記載セ			
ルハ何レモ夏期ノモノニ屬シ是等ノ			
航路ハ冬期ニ至ルハ其使用船舶數ヲ			
減少シ或ハ休航セラルルモノ尠カ			
ズ又牛莊及ビ天津ヲ終矣トセルモノ			
ハ右西港ノ結氷中ハ秦皇島ヲ以テ終			
点トス			
在芝罘日本領事館			
甲定期航路ニ屬スルモノ			
一神戶韓國北清線(逓信省命令航路)			
該航路ハ郵船會社ノ行ヲ所ニシテ			
神戶ヲ起矣トシ門司長崎釜山仁川			
芝罘大沽ノ各地ニ寄航シテ牛莊ニ			
至リ支レヨリ同一航路ニヨリ歸航			
スルモノトス目下同社ハ相模丸一			
隻ヲ使用シ約一ヶ月ニ一回ノ航海ヲ			
ナセリ			
一神戶北清線(逓信省命令航路)			
此航路ニ郵船會社ノ營ナルモノニ			
シテ甲乙二線ニ分テ甲線ハ往航			
ニ長崎ヲ着キテ復航ニ寄港シ乙線			

ハ往航ニ長崎ニ立寄りテ復航ニハ	江ヲ浦ヲコトトシ此兩線ヲ相交ヘ	テ一月ニ約四回ノ航海ヲ營ナリ	一 大阪北清線	此航路ハ大阪商船 <small>會社</small> ノ所ニシ	テ大坂ヲ起矣トシ神戸門司芝罘ヲ	經テ天津ニ至ルモノナリ同社ハ特	ニ該航路ニ使用ノ目的ヲ以テ建造	シタル大智丸(七八〇噸)大信丸(八〇九噸)	ノ二隻ヲ用ヒ毎五ノ日ニ大阪ヲ出	帆シ大沽ヨリ白河ヲ遡航シ天津紫	竹林ニ至ル	一 上海青島芝罘天津線	該線ハハングンガアノリカラインノ從事ス	ルモノニシテ「クレトケ」(一名大臣一〇〇八噸)「チ	ンタウ」(一名青島九七七噸)「チルピツ」(一名提督一〇九九噸)	ノ三隻ヲ使用シ四日及至六日毎ニ	一 航海ヲナセリ	浦潮韓國北清線	此航路ハ露國東亞汽船會社ノ經營	ニ係リ浦潮斯德ヲ起矣トシ元山釜	山長崎仁川上海芝罘ノ各地ニ寄港	シテ大連ニ至リ更ニ同一航路ニヨ	リ浦潮斯德ニ復航スルモノトス目	下該航路ニ使用セシ船舶ハ「ルンム」ニヤ	「ソシ」ニヤ「ム」ニヤノ三隻ニシテ毎月二
-----------------	-----------------	----------------	---------	---------------------------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------------	-----------------	-----------------	-------	-------------	---------------------	---------------------------	---------------------------------	-----------------	----------	---------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	---------------------	----------------------

ニミテ毎月二回ノ航海ヲナセリ

在芝罘日本領事館

一 浦潮、韓國、北清線
 此航路、露國東亞汽船會社ノ經營ニ係
 リ浦潮、斯德ヲ起點トシ元山、釜山、長崎
 仁川、上海、芝罘、各地ニ寄港シテ大連ニ至
 リ更ニ同一航路ニヨリ浦潮、斯德ニ復航
 スルモノトス目下該航路ニ使用セル船舶
 ハルンムン、ヤーンソ、ライムン、三隻ニシテ毎月
 二回、航海ヲナセリ

一 芝罘、安東縣線（逋信有命令航路）
 該線、阿波共同汽船會社ノ管轄ニ係リ
 芝罘ヲ起點トシ大連ニ寄港シテ安東縣ニ至
 一週一回、航路トス

在芝罘日本領事館

芝罘
天津
威海衛

513

一 芝罘、安東縣線 (逕信省命令航路)
 該線ハ阿波共同汽船會社ノ管ム所
 ニ係リ芝罘ヲ起莫トシ大連ニ寄航
 シテ安東縣ニ至ル一週一回ノ航路
 トス

乙 不定期航路ニ屬スルモノ
 一 上海、芝罘、天津線
 本航路ハ太古洋行(ヤナイナ、ナビゲー
 ション、コンパニー)代理店(怡和洋行(イン
 ドチヤイナ、スチーム、ナビゲー
 ー)代理店)及招商局ノ共ニ力ヲ用ヒ
 居ル所ニシテ其最モ盛ナルハ結氷
 及解氷ノ兩期トス

在芝罘日本領事館

一 上海、威海衛、芝罘、天津線
 此航路ハ主トシテ太古洋行、管リ
 ルモノナリ

一 上海、芝罘線
 招商局、太古洋行、怡和洋行、三會社
 共此航路ニ從事セリ

一 上海、威海衛、芝罘線
 太古洋行ノ上海、芝罘線ノ汽船が時
 々威海衛ニ寄港スル位ニ止マリテ
 其數極ソテ少ナシ

一 上海、芝罘、牛莊線
 牛莊ニ天津ト同ジク冬季結氷スル
 ヲ以テ船舶往復ノ最モ頻繁ナルハ

解氷後及結氷前ノ兩期トス而シテ
 目下此航路ヲ管ノルモノハ招商局
 太古洋行怡和洋行ヲ主トシ其他運
 漕業者ノ船舶ニシテ臨時廻航スル
 モノモ少シカラズ是等ノ船舶中ニ
 ハ往航又ハ復航ニ於テ時々芝罘ニ
 寄港セザルコトアリ
 上海青島芝罘牛莊線
 本航路ハ專ラ怡和洋行ノ經營スル
 モノニシテ往航或ハ復航ニ於テ芝
 罘又ハ青島ニ寄港セザルコトアリ
 香港芝罘天津線
 此航路ハ專ラ太古洋行所有船舶ノ往
 復スルコトニヨリ
 在芝罘日本領事館
 芝罘威海衛線
 此航路ニ從事スルモノハ在芝罘其
 和洋行取扱ノ本邦船舶貫九(ハセ)ヲ
 主トシ其外當港ヲ根據トシテ渤海
 灣沿岸諸港間ヲ往復スル本邦航船
 ニシテ臨時威海衛ニ寄港スルモノ
 少シカラズ
 芝罘牛莊線
 此航路モ亦重ニ本邦船舶ノ往復スル
 所ニシテ解氷後及結氷前ノ兩期ニ
 盛ニシテ夏期ニハ殆んど休止セ
 3
 ン

315

海

一 芝罘大連線及芝罘旅順線
 現今該航路ニ從事セルモノハ總テ
 芝罘ヲ根據トセル本邦航船ニシテ
 其最モ盛ナルハ春秋ニアリ同期ニ
 至シバ當港ニ於ケル政記公司順義
 公司、泰信洋行其和洋行山縣洋行和
 華洋行等ノ各船舶業者ハ此兩航路
 殊ニ大連航路ヲ管マザルモノナシ
 而シテ是等ノ船舶ハ總テ夕刻當地
 リ出帆ニ翌朝彼地ニ入港スルリ
 常トス

一 芝罘仁川線
 此航路ヲ管ムモノハ清商順義公司
 取扱ノ本邦航船トス
 在芝罘日本領事館

一 芝罘浦潮線
 當地清商ノ雇入ニ係ル本邦船及
 ンハ商會、ジニマン商會及セブセン
 商會取扱ノ外國船ニシテ其航海ノ
 最モ頻繁ナルハ解氷後及結氷前ノ
 兩期トス

一 芝罘安東縣線
 此航路モ大連及旅順航路ト同ジク
 目下全ク本邦船ノ獨占ニ歸セリ

一 芝罘登州龍口虎頭崖羊角溝線
 本航路ヲ管ムモノハ本邦船及英
 國船ニシテ就中太古洋行ハ揚子江

頁

316

ノ航行ニ使用ノ目的ヲ以テ建造シ
 タル淺吃水船閘江辨(三方七屯)ヲ廻航
 シ約一週間ニ一回ノ航海ヲナシワ
 ヲアリス

一開港場船舶
 △第三威海衛ニ於ケル海運

去ル明治三十七年中威海衛ニ入港セ
 其船數ハ流船出入港各三百十五隻
 其船數ハ流船出入港各三百十五隻
 船御用船並ニ威海衛芝罘間ヲ往復セシ小形流船ヲ除ク
 ニシテ三十五年及三十六年ニ比シ非
 常ノ増加ヲ示セリ若シ前記ノ計數中
 ニ威海衛ト芝罘大連其他渤海湾沿岸
 諸港間ノ貿易ニ從事セル本邦小形流
 船ヲ加フハ時々其數ハ更ニ増大スベ
 シ現ニ是等本邦船舶ノ威海衛ニ入港
 セルモノハ三十七年第一期(三月
 ニ至ル)間ノミニテ六十四隻一萬四
 千五百五十四屯ノ多キニ上リ

在芝罘日本領事館

尚ホ三十七年中威海衛ニ出入セル船
 船ノ出入港先ヲ分テ其國籍別ヲ明ニ
 シ之レシテ三十五年並ニ三十六年ト比
 較スレバ次ノ如シ

船舶出入港別表

出入港名	入 港			出 港		
	明治三十七年	明治三十八年	明治三十九年	明治三十七年	明治三十八年	明治三十九年

海 319

現 時 航 路	一 算 入 セ ズ	備 考	計	國籍				獨 乙	英 國	回 籍	計	在芝罘日本領事館											
				本 國	清 國	諸 國	獨 乙					日 本	韓 國	香 港	汕 頭	青 島	大 連	旅 順	牛 莊	秦 皇 島	天 津	芝 罘	上 海
現 時 航 路	一 算 入 セ ズ	備 考	計	本 國	清 國	諸 國	獨 乙	英 國	回 籍	計	日 本	韓 國	香 港	汕 頭	青 島	大 連	旅 順	牛 莊	秦 皇 島	天 津	芝 罘	上 海	
			三二五	二	一四	一	二	二九六	二九六	三二五	三二五	四	四	二	三九	一	一	一	六	四	四	一四四	一三七
			三二五	一〇六	三二七	九八八	二、〇〇〇	二九六	二九六	三二五	二四二	三	一	一	一	一	一	二	五	四	四	一〇三	二一九
			三四三	三	四	一	二	二二二	二二二	三四三	一四六	四	一	一	一	一	一	一	一	二	四	九一	九一
			三四四、九四〇	二一七八	三〇七六	一	一、六八八	二九六	二九六	三四四	三一五	二	三	九	一	九	一	八	四	八	八	一五二	二一九
			一四六、一五二、一〇九	四	二	一	一	一四〇	一四〇	一四六	二四二	三	一	七	一	二	一	八	一	三	三	一〇一	一〇一
				二、三九八	二、〇六八	一	一	一四七、四四三	一四七、四四三	一四六	一四六	一	一	一	一	一	一	一	一	四	九一	四六	四六

出入船舶國籍別表

在芝罘日本領事館

明治三十七年
明治三十六年
明治三十五年

現時航路
一算入セズ
備考
威海衛芝罘間
往復セシ
小汽船ヲ
備考
本表
ハ
海軍
運送
船
御用
船
及

虎

318

太古洋行	北清航路	船方郵便物運搬	為ノ一週間	往復各一回	以上同地	寄港スルト	怡和洋行	及招商局	所屬	北清航行ノ船	船方臨時入港	スルコト	アシニ過キ	本邦船ニテハ	狭貫丸	ガ	芝罘ヲ根據トシテ	約四日毎ニ	一航海	ヲ為セル	外當港旅順	大連	仁川	等ノ間	ヲ往復セル	モシテ	其往航	或ハ復	航ニ於テ	時々威海	威ニ寄ル	元ノ少	十カヲス	一開港場船	船	昨三十八年	中青島港	ニ入港	セル船	船	在芝罘	日本領事館	ハ流船	四百隻	帆船	六隻	其他	合計	四	十二	万二千	六百七	十三	噸	ニテ	内流	船三百	二十七	隻	航船	六隻	ハ貨物	ヲ搭	載ニ其他ノ流船	七十隻	ハ空船	ニテ	入港ニ又出港	船舶ハ流船	三百九	十九	隻	帆船	六隻	ニシテ	内流船	三百十五	隻	ハ載貨ニ其他ノ流船	八十四	隻	帆船	六	隻	ハ空船	ニテ	出港	七十	噸	而シテ	昨年度	出入港	總數ハ	八百一	隻	八十四	万	三	千	六	百	三	十	噸	ニテ	前年	ニ比較	スル	ニ	五	十	五	隻	三	万	七	千	六	百	十	六	噸	ヲ增	加セリ	今是等	船舶ヲ	國籍	ニヨリテ	區	別ニ	三十七	年ト比較	スレバ	次ノ如シ
------	------	---------	-------	-------	------	-------	------	------	----	--------	--------	------	-------	--------	-----	---	----------	-------	-----	------	-------	----	----	-----	-------	-----	-----	-----	------	------	------	-----	------	-------	---	-------	------	-----	-----	---	-----	-------	-----	-----	----	----	----	----	---	----	-----	-----	----	---	----	----	-----	-----	---	----	----	-----	----	---------	-----	-----	----	--------	-------	-----	----	---	----	----	-----	-----	------	---	-----------	-----	---	----	---	---	-----	----	----	----	---	-----	-----	-----	-----	-----	---	-----	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	-----	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	-----	-----	-----	----	------	---	----	-----	------	-----	------

海 319

青島出入ノ船舶ノ同地ニ於テハ貿易ノ為	總計	計	佛國	獨乙	米國	英國	計	清國	瑞典	埃太利	丁抹	露國	諾威	韓國	日本	獨乙	佛國	和蘭	英國	米國	國籍		明治三十八年	明治三十七年
																					隻數	噸數		
帆船	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
汽船	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
總計	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
噸數	1,234	1,234	1,234	1,234	1,234	1,234	1,234	1,234	1,234	1,234	1,234	1,234	1,234	1,234	1,234	1,234	1,234	1,234	1,234	1,234	1,234	1,234	1,234	1,234

開港場船舶國籍別表

在芝罘日本領事館

友

海 320

年次	入港船隻数		出港船隻数	
	隻数	噸数	隻数	噸数
明治三十二年	1	1	1	1
明治三十三年	194	26,580	190	29,060
明治三十四年	219	29,755	221	33,322
明治三十五年	226	26,325	237	24,710
明治三十六年	277	28,015	277	28,384
明治三十七年	343	27,940	344	27,693
明治三十八年	400	44,936	399	42,670
明治三十二年	1	1	1	1
明治三十三年	10	5,310	10	5,310
明治三十四年	10	7,655	4	6,314
明治三十五年	7	8,977	8	10,431
明治三十六年	8	9,189	8	9,189
明治三十七年	8	8,153	7	6,851
明治三十八年	6	7,747	6	8,287
明治三十二年	1,237	1	1,185	1
明治三十三年	2,514	1	2,190	1

達ト共ニ逐年増進ノ傾向ヲ呈セリ今
 昨三十八年中ニ入港シタル汽船ノ数
 同地開港ノ翌年タル明治三十五年
 ニ對照スルニ隻數ニ於テニ倍強ニ數
 ニ於テ約ニ倍ノ增加ヲナセリ
 出入港船隻七ヶ年間比較表

在芝罘日本領事館

西洋形帆船

民船

海 321

寧波	福州	港名	民船出入港別表		港積量	担
			入港	出港		
五二	二四				四五	二七
<p>航二回ハ貨物ヲ搭載シ往航五回復航 八回ハ空船ニテ航行セリ 三民船 昨三十八年中北清及南清各港ヨリ青 島ニ出入セシ民船ハ入港四千三百八 十九隻其積量百四十五千二百五担 ニシテ去リ一昨年ニ對比スルニ出入 港總數ハ於テ四百十八隻四十五万五 百八十二担ヲ増加セリ</p>						
<p>青島ニ於テハ是迄内地航路ヲ營ミ ルモノナク漸ク昨年ニ至リ青島海州 間ノ航海ハ獨乙流航運果号(一三五七)ニヨ リテ開始セリシムルニシテ諸種ノ障害殊 ニ航海ノ困難ナルガ多ク昨年亦ニ至 リ遂ニ休止セリシムル而シテ同航ハ 海州へ向テ十一回航海ニ往航六回復 在芝罘日本領事館</p>						
全三十四年	三〇六二				三三五六	
全三十五年	二九六六				二八二五	
全三十六年	三〇八八				三二四五	
全三十七年	三九九〇				四五一七	
全三十八年	四三九九	八三六五			四三三六	八六二九七

度

海: 122

上海州	一五〇	一、四〇五、二〇五	一、三三七
上海	二七六		二、八九
石浦	一七三	一、四〇五、二〇五	一、五二
通州	一七三		一、八一
大東溝	一		一、八一
山東省西	一、方二二		一、五二
中諸港	九、方		一、〇〇〇
東北諸港	四、三、九	一、四〇五、二〇五	四、五、三、六
合計			一、四四九、七九四

定期航路ニ属スルモノ
 一、上海青島芝罘天津線
 該航路ハ「カンブルガア」ノリオリオ、ライセルノ船ヲ
 用ル所ニシテ、四日乃至六日毎ニ一回
 在芝罘日本領事館
 ノ航路ヲナセリ (芝罘ノ郵務獎)
 此航路ヲ行ハルモノハ「カンブルガア」
 及「怡和洋行」ノ二社ニシ
 テ前者ハ「ガ
 (四一七屯)ノ用
 ナシ後者ハ
 テ一週一回
 一、青島神戸線
 此航路ハ「東
 洋」ノ船ヲ用
 ヒ一週一回
 航海ヲナセリ、本邦船
 航海ヲナセリ、本邦船
 航海ヲナセリ、本邦船

323

西比利亞滿洲
出稼人
出稼秘

乙 不定期航路之偏るる
一 上海青島芝罘中庄線
主トシテ 怡和洋行ノ行ヲ所ナリ

第四 乘往旅客

汽船ニヨリ芝罘ト内外國諸港間ヲ往
來スル旅客數ハ累年増加シ趣向ヲ示
シ其大部分ハ清國出稼人トシテ元來富
山東省ハ比較的土産地産ニシテ農工
ニ適セズ加フハ人口稠密ナルヲ以
テ下等人民ハ内地ニ於テ生活ノ資ヲ
得ルニシテ甚分困難ナルガ故ニ毎年露
領西比利亞滿洲及旅大ニ出稼スルモ

在芝罘日本領事館

ノ十數万ノ多キニ達ス是等ノ労働者
ハ春期各地ニ渡航シ秋期ニ至リ帰郷
スルモノナシハ春秋ノ二期ニハ其輸
送ノ目的トシテ當港ト浦潮斯德安東
縣大連牛莊間ノ航海ニ從事スル内外
汽船十餘隻ノ多キニ上ルヲ常トス
トラスバ「政廳ハ全回鑛山ニ便役ノ
目的ヲ以テ一昨年来當地方ニ旅シ勞
働者ヲ募集シ大汽船ヲ廻航シテ之ヲ
南亞ニ輸送セリ而シテ昨三十八年中
同地ニ渡航シタル是等ノ契約民ハ
七千七百八十六名ニシテ一昨年ニ比
シ四千三十九名ヲ増加セリ今最近十

324
海

年間ニ於ケル内外國人來往旅客數ヲ示セバ次ノ如シ
來往旅客十ヶ年間比較表

年次	往		來	
	外國人	支那人	外國人	支那人
明治三十九年	八〇二	五四、五〇九	八四六	三六、七〇六
三十九年	七四五	五〇、二四九	六九〇	五〇、五二九
三十九年	八七四	四七、九六二	一、〇九九	五二、二五九
三十二年	一、八一九	九一、三〇一	二、〇三二	八三、四五四
三十三年	一、七〇六	九八、四六三	三、三三一	一一九、六五六
三十四年	三、〇三一	一七六、一四六	三、四五五	二〇〇、一六六
三十五年	三、三四九	一九一、三五六	四、一四八	一九九、〇七九
三十六年	三、一七九	一三一、九九七	四、六八八	一六六、九二四

在芝罘日本領事館

明治三十七年
三十九年
尚亦青嶋ニ於ケル去ル三十九年ヨリ
昨三十八年、至ル流船來往旅客ノ數
ヲ掲グシバ左ノ如シ
來往旅客三ヶ年間比較表

年次	往		來	
	外國人	支那人	外國人	支那人
明治三十六年	五八二	一、五九九	九七六	一、七三七
三十七年	一、三〇一	二、七二二	一、五六二	三、一七六
三十八年	一、三三八	三、九八八	一、二〇六	四、二五三

325
概説

第二項 水運

△第一項 小清河

小清河ハ清水ノ故道ニシテ其源ヲ章
 邱縣ノ東南東陵山ニ發シ鄒平長山新
 城博興高苑衆安壽光ノ各縣ヲ經テ茅
 角溝ニ達シ海ニ入ル然ルニ今ヲ距ル
 十餘年前盛宣懷力東海關道トシテ芝
 罘ニ在任セシトキ濟南トノ連絡十分
 ナラザルヲ遺憾トシ舊水道ニヨリテ
 章邱縣ヨリ起リ更ニ濟南府迄開鑿竣
 業シ其延長實ニ四百八十浬（我カ四十
 八里餘）爾來濟南府ヨリ海ニ通スル惟
 一ノ水道トナリ往來上下スル數百ノ

在芝罘日本領事館

帆船ハ輻輳シ沿岸各都府ノ貨物吞吐
 ニ一大便益ヲ興ヘ現ニ濟南茅角溝間
 ヲ航行スル支那船舶大小合シテ一
 年三ヶ餘隻ノ多數ニ上ルニ至リ而
 シテ此等ノ船舶ハ芝罘營口天津各地
 方ノ貨物輸送ニ徑事シ以テ其ノ
 ニシテ小清河ノ山東省交通上重要ナ
 ル地步ヲ占ムル蓋シ世ノ人意想ノ外
 一沿岸府縣
 小清河ハ流ノ近接若クハ貫通セル府
 縣ハ歷城章邱長山博興高苑衆安壽光
 ノ各縣ニシテ其縣城ノ所在トハ近

ハ教清里邊キモ十餘清里ヲ出テヤン
 距離ニテハ就中鹽城縣ハ清南府城ノ
 所在地ニシテ人口廿五万市街繁盛物
 資饒裕ナリ大市府ニシテ高苑縣下ノ
 岔河ハ上下船舶ノ碇泊場ニシテ加ノ
 陸路六十清里即チ騎歩共ニ一日行程
 ニ滿テヤリ青島ニマニテ以テ山東鉄
 道ニヨリテ青島ニヨリ内地ニ輸入スル
 貨物以外別ニ芝罘其他ノ地方ヨリハ
 清河ニヨリテ岔河ニ至リ岔河ヨリ周
 村ニ輸入スルモ願ハ多ク鉄材木材
 ノ如キ年々少ナカラシキ輸入ヲ見ル

在芝罘日本領事館

ノ現状ニテ又博興縣ハ商業地トシ
 テハ比較的重要ナル土地ニ非カシモ
 桑安縣ニ至テハ土地膏腴人口繁盛ニ
 シテ雜穀ノ産出者額ナルモノアリド
 毛要スルニ沿道各都府ハ概シテ繁盛
 ナル市場ナリト稱スルヲ得サハハ河
 流ノ状態ガ各地ノ商業開發ニ對シテ
 ナ方ノ利便ヲ與フン事困難ナルニ基
 因ヲシモノニシテ一朝河流ノ上下ヲ
 通シテ浚深ノ効ヲ奏シ特ニ河口ノ淺
 灘ヲ除却スルヲ得テ大形船舶ノ航行
 ニ適スルニ至ラハ沿岸各都府ノ發達
 期シテ見ル可キモノアリトシテ至ルハ必

3247

然ノ勢方ニシテ又疑ヲ容シヤル所ナリ
トス
二航行船舶
小清河々々口ハ上流ヨリ流下スル沙泥
ノ為メニ年々蔽塞セリ大形汽船ノ
出入困難ニシテ日下同地ヲ出入シ得
ル汽船ハ極メテ寡々ト有様ニテ多
クハ羊角溝ヨリ距ル七八哩乃至四五哩
ノ地真ニ達シ得ルノミ故ニ羊角溝清
南間ヲ上下スル船ハ悉ク小ハニシ
此ヨリ大ハ十餘屯ニ過ヤヤ支那船
ニシテ之ヲ大別スルハ貨物運搬用船
旅客船及大形客船ノ三種ニシテ内貨
物運搬用ノ方ハ普通渤海沿岸各地ヲ
航行スル大形ヨリト異ルナリ旅客
搭載用ノモノハ純然トシテ客船ニシテ
羊角溝清南間ヲ上下スル旅客ノ月の
トシテ作リ船体ノ上部ニ高く船室
棟ノモノヲ作り内部ニニニ、床台ト
モ云フ可キ板片ヲ備エ両側ニ窓ヲ穿
テ旅客ノ止宿ニ便ニシ船底ニハ考少
ク手荷物ヲ容ルルヲ得帆樫ハ一考ニ
シテ船取ル前途船室新ノ上辺ニテ
テ四圍ヲ展望シ、方向ヲ定メ帆ヲ
上下シ以テ紆餘曲折ナリ河流ヲ上下
航スルニ便ニス貨物運搬用ノモノニ

在青島日本領事館

伊

328

至リテハ一種特別ノ形状ニテ兩船ヲ
 縦ニ繋合シテ一隻トナシ之ヲ分テハ
 二隻ト為スリ得ルカ如キ平板ナリ構
 造ニシテ雜穀其他重量品ヲ積載スル
 二便ナリシモノモノニシテ蓋ニ水
 深極メテ浅キ地莫クアリテ吃水深キ
 船船ヲ航駛スルニト不可能ナリ力故
 二平面ニ於テ比較的考量ノ物品ヲ積
 載スル必要上斯ノ如キ船船ノ構造ヲ
 案出シタルモノノ如ク以上三種ノ船
 船ハ潮江ニハ穩或ハ杆ヲ用ヒ間々帆
 ノ力ヲカハモ重キ力ニヨリテ岸上
 ヲ歩行曳船スルカ故ニ羊角溝南間
 在芝罘日本領事館

二約四五日ヲ費シ下航ハ順風ナリ
 バ濟南ヨリ二日ニシテ羊角溝ニ達ス
 ルコトヲ得
 三河流ノ現狀
 小清河ハ天然ノ河流ニ人エヲ加ヘテ
 運河ナリト雖モ曲折甚シカラズ其
 河口ハ一面荒漠タル水路ニテ河口
 ノ果シテ何處ニアルヤヲ識別スルコ
 ト能ハズ水深モ又不定ニシテ一室ノ
 航路ナク為テ一般航海者ハ海國ニヨ
 リテ虎頭崖ヲ發シ羊角溝ニ向テは臨
 三羅針盤ヲ用ヒ河口迄ノ航路ヲ限定
 一直接ニ航行スルモノニシテ其河

海 329

口ニ近クヤ水深次第ニ低下スルヲ以
 テ常ニ周密ニ測量シテ進行セサシ
 可ラズ河口ニ入ル航路ノ地矣。當
 哩即羊角溝リ距ル約八哩ノ地矣。當
 リ西側ニ立標ヲリテ航路指定シテ
 立標附近ノ水深約七尺八寸ニシテ此
 ヲ水深次第ニ浅ク六七呎ヨリ十呎
 ニ至ルモノ如ク微速力ニシテ此淺
 灘ヲ通過スルニ約二十分(三十餘ノ水道
 ニ至テ水深又次第ニ増シ七呎ヨリ十
 ニ至スルモトス)ヲ以テ羊角溝
 河口即航路ノ中央ニ當リテ此淺灘最
 在芝罘日本領事館
 淺水及リ航路ノ船ニシテ此淺
 灘ヲ通過スルニ適スル浅吃水ヲ有ス
 ハモノ極メテ稀レニシテ現今此航路
 ニ徑事スル閩江及チ和流船神龍丸ノ
 如ク羊角溝ニ向テ先チ虎頭崖ニ
 於テ潮時ヲ量リ河口ニ於テ滿潮ニ尺
 ノ差ヲ利用シテ漸ク此淺灘ヲ通過ス
 ンモトス
 此淺灘ノ要スル泥沙ノ積積セルモ
 ノニシテ小清河ノ上流地方ヨリ流下
 セル沈澱物ト海面ヨリ潮水ノ壓迫ヲ
 受ケル泥沙カ河口ノ西側ヨリ海面

突出せん長大ナル徳雅ヲ踏テ水路
 中央ニ沈澱固着シタルモノ如ク
 水深ヲ測量スル際竹竿ヲ投テハ約
 四五寸程^没入スルヨリ考テハ
 其海底ハ強ク粘着力強キ沙泥ナリト
 云フハ不當ニシテ河口ニ輻輳せん遠
 洋航海ニ適せん大坂支那^江河口ニ進
 キ潮水ノ干満ニ関セズレテ河口ニ進
 行ニ其一旦泥沙ニ逢着シテ膠^坐ス
 ヤ即投錨シ西北風ヲ待ツテ常トス既
 ニニテ此地方ニ於テ常ニ見ル西北風
 ノ吹クヤ滿帆ノ風力ヲ利用シ泥沙ノ
 上ヲ擦過シテ無事羊角溝ニ達スルヲ
 普通トスルヲ以テ見ルモ要スルニ其
 船底ノ構造ガ偏平ナルニモセヨ泥沙
 ノ比較的柔軟ナルヲ証スル好適例ナ
 リトス
 羊角溝ヨリ小清河ヲ溯ル事約百浬
 ノ間ハ河幅二百間内外ノ寛サニシテ
 水深モ亦五呎ヨリ十呎ニ至リ潮水
 ノ干満ヲ感ズルニト四呎ニ及ブ更ニ
 上流ニ溯レバ河幅約三四十間水深六
 呎位ノ平均ヲ以テ張家林ニ達シ張家
 林ヨリ濟南府間ハ河幅大ニ減シテニ
 ナ餘間トナリ水深モ亦六呎以下ニ在
 ルヲ以テ常ニ淺瀬船ヲ用ヒテ沙泥ヲ

在芝罘日本領事館

海 351

後深シ又水深ノ一定ヲ保持スルカ爲
 ノ各所ニ敷田ノ水門ヲ設置セリ
 四將未施設
 小清河ヲ浚深シテ大形船舶ノ航行ニ
 適セシメント全回ハ遠世凱カ小東
 巡撫ヲリシ時ヨリ計画ヤシムルモ
 ニシテ其後舟楫揚士驟興ニ計画
 ヲ踏襲擴張シ来リル有様ニシテ珠
 現在巡撫楊士驥ハ小清河ニヨリテ独
 己ノ山東鉄道ニ對抗セシメ以テ幾分
 ノ利權ヲ挽回セシト欲シ就任後幾モ
 無ク自ラ此河ヲ通航シテ親シク實地
 ヲ踏査シ資本金十萬兩ヲ投シテ小清
 河輪船公司ヲ組織シ道員唐榮浩ヲ之
 レガ總辦トナシ小清河ノ床ヲ浚深シ
 常ニ一定ノ水深ヲ保シムルコト河
 口ヨリ沖合ニ運乃至四海運ノ處迄幅
 員約二百間深ヤ約八呎迄開鑿浚深ス
 ンコトトシ其右常ニ浚深船二隻ヲ使
 用シテ浚深ニ從事セシメ又堤防ヲ築
 キ水門ヲ設ケ一定ノ水深ヲ維持セシ
 ノ上流張家林濟南間ヲ幾段ニ分テ各
 擔當委員ヲシテ浚深堤防建築水門設
 置等ヲ分擔セシメ昨秋漸々大體ノ竣
 工ヲ告ゲ上下四百八十浬ヲ通シテ
 水深四尺以下ニ下ルコトナカシム

在芝罘日本領事館

伊

392

海

ルヲ得たり。毛尚ホ時々山水、暴漲ト
 上流ヨリ流出スル泥沙、為テ河床特
 ニ河口ヲ淺クスル、恐マシキヨリ直
 隸省、白河浚濬用大形浚濬船一隻ヲ借
 り、夏々小清河ノ河口ニ横ハル淺洲ノ
 浚濬ニ経手セシムル計畫ナリ
 春夏秋ノ三期ニ於テハ小清河ノ水深
 ハ上下流地方ヲ通ジテ一定ノ水深ヲ
 保テ得んニ冬期ニ至シハ各處水源ノ
 涸竭スルト共ニ船舶ノ航行ニ不便ヲ
 来スノ恐アリト一面ニハ白河浚濬船
 ニヨリテ河口浚濬事業ノ成上セシ
 ニ至リ箱ノ大形ナル汽船ヲシテ能ク
 可クニハ上流迄航駛スルヲ得ル哉ニ
 始メテ山東鐵道ニ對スル對抗策ナリ
 當初ノ企画ヲ全フスルモノナシハ河
 口浚濬ト水深增長トハ一時ニ着手ス
 可キモノナリテ以テ從來黄河或ハ運
 河ノ水流ヲ引クノ議アリシニ成ラズ
 茲ニ昨年ニ至リ實地踏査、上流南ヲ
 距ル四十浬清里ノ地ニ至リ符河ノ
 河水ト中間各地ノ積水及新河等ノ各
 水ヲ引キテ且以夏時ノ暴漲ニ際シテ
 兩岸堤防ヲ破壊ニ沿岸住民ニ危陰ヲ
 與フルノ慮アリニヨリ外國ニ行ハル
 鉄製水門ヲ至符河小清河間ノ各所ニ

在芝罘日本領事館

海

999

設ク必要ニ應ジテ之カ開闢ヲナシ以テ水深ヲ維持セシムル計画ニテ現ニ目下実行ニ着手中ナルヲ以テ此等諸計画ノ実行セウシ竣成ノ曉ハ小清河ノ効用延テ沿岸各地ノ開發ニ不影響ヲ及ス可キハ必然ノ勢ナリトス而カモ唯小清河ニ於テ見ル一ノ缺欠ハ冬期渤海ノ各港カ凍結スルト共ニ旧曆十一月ヨリ翌二月ノ初旬ニ至ル迄羊角溝ノ凍結ニヨリテ一切船舶ノ交通停止セラルノ一事ニ在リトス

在芝罘日本領事館

△ 勞二 運河

山東省シ貫通スル運河ハ京師ノ運道ニ於テ所謂江北運河ナルモ是ナリ運河ハ延長五百五十哩ニ亘リ直隸山東江蘇浙江等ノ諸省ヲ通過シ江南下邳ノ梁王城ヨリ東ル一五清里ニ嶧縣ノ縣境ニ入り黃林莊ニ於テ初メテ山東ノ境界ニ入ル嶧ヨリ西流シテ濟甯川ニ達ス此間嶧滕西縣ノ交界ニ於テ西方一帶ノ堤防シ隔テ、微山湖ニ接シテ、東北ノ諸山ヨリシテ微山湖ニ注入スル各水流ノ中間シ貫通ス地勢此ニ至テ漸ク高マリ水深次ヲ低下スルヲ以テ各水流ノ微山湖ニ注入スル処ニ於テ(即チ十字島)其間各數所シテ隔テ、數回ノ水閘ヲ設ケテ河水ノ停蓄シ計ル沛、魚台兩縣ノ境ニ在リテ昭陽湖ヲ過ギ湖水ノ中央ニ堤防シ設ケテ水路ヲ作り之ヲ貫流土テ魯橋ニ抵リ此処ニ於テ末リ會スル泗水ト合流ス

在芝罘日本領事館

濟寧川ヨリ西北流シ汶上縣ニテ蜀山及ヒ南陽兩湖水ノ中間ニ築キタル堤防ノ中間一條ノ水路ヲ貫通スル一昭陽湖ニ等シ蜀山湖ハ汶水ノ注入ヲ受クルヲ以テ間接ニ運河ノ水量シ増加ス

海 335

スルモノトス是ヨリ以南之水勢常ニ
 南流シ是ヨリ以北之水勢常ニ北流ス
 斯クシテ東平州ノ界ニ入り十里堡墩
 ノ東南及張秋墩ノ東南ニケルニ於テ
 共ニ新黄河ノ末リ會スルニ遇ヒ更ニ
 北流シテ東昌府ノ附近ニ於テ徒駭馬
 頰ニ河ノ注入シ受テ臨清州ニ至テ衛
 河ト合流ス臨清ニ於テ衛河ト合流シ
 タル后ハ水勢平穩ニシテ水量亦少ナ
 カラス敵テ水閘ヲ設クルノ必要ナク
 東北流シテ恩縣故城縣德州ヲ過キテ
 直隸ノ境界ニ入ル
 運河ハ故ト漕運ノ故道ニ各各地ノ湖
 沼ヲ連結シ加フルニ泗水汶水衛水等
 各河川ノ注入シ受クルシ以テ夏時山
 水ノ暴漲シ利用シテ各所ニ水閘ヲ設
 ケテ此等ノ流水ヲ停蓄シ舟楫ノ便シ
 助タルト少ナカラスト魚要スルニ山
 東省ニ於ケル運河ノ部令申往々大運
 河トシテ世人ノ藉々スル程ノ一ナキ旧
 所少シトセス河幅ノ如キモ間々二十
 五六呎シ出ラサルトコロアリ唯濟甯
 州以南今ヨリ十數年前改修ノ工事
 アリタル為ノ多少ノ利便シ増シ德州
 武城聊城地方ニ至リ其効用シ増シ更
 ニ衛河ノ會流シ得テ其効用極ニ著ハ

在芝罘日本領事館

伊

運河ヲ航行スル船舶ハ力ヲ用キテ
 兩岸上ヨリ繩索ヲ以テ牽カシムル
 ナルカ冬季山水涸渴スルニ降セハ運
 河經過ノ地方中地勢稍高キ箇処ハ河
 水ノ減量ト共ニ凍結シ見ルヲアリ之
 カ為ノ旧曆十月末ヨリ翌年二月初旬
 迄ハ航通ノ利ヲ失フモノトス但シ以
 上ノ情態ハ臨清川以南ニ於テ見ル如
 ニシテ臨清川以北ハ該地ニ於テ合流
 スル衛河ノ為メ大ニ其水量ヲ増シ
 水勢モ亦頗ル急トナリ従来涸渴阻礙
 ノ恐れアリシヲ聞カス臨清ヲ棄ス
 在芝罘日本領事館

レハ一週月ニシテ能ク天津ニ達スル
 シ得ルカ如キ有様ニ山東運河ハ一
 ニ衛水ノ會合ニ依テ僅ニ能ク交通ノ
 利ヲ享クト云フモ不可ナキナリ

臨清^州山東北部ノ大市府ニ倚水
 ニ依リテ輸入スル河南及山西地方ノ
 雜穀藥材材木鐵器絹帛等各種貨物ノ
 集散地ニシテ然カモ衛河ニ沿ヘル地
 方一帶ノ地味肥沃ニ各種雜穀ノ産
 出亦少ナカラズ加之ナラス此地運河
 ニヨリテ天津ニ通スル要衝ニ當ルヲ
 以テ運河經過地方中高峯ノ殷盛ヲ一
 ト裕セラルル次ニ德州ハ運河ノ末往

337

海

下スル航各船舶ノ碇繋場ト著名ナ
 リ同地ニ極メテ盛ナル棧所製造
 所アリ市場ト輕視ス可ラサルモノ
 アリ
 臨清以南運河ノ兩岸ニ於ケル市場ハ
 東平、東昌、濟甯ノ二府一川ニ就中東
 昌存シ以テ繁盛ナルモノトス其東往
 貨物ハ江蘇省ヨリ輸入スル各種日用
 雜貨品即チ砂糖、綿、布、紙類等及
 ト新黃河ニヨル河南省產出ノ藥材阿
 片等ナリトス
 運河シ航各船ノ運送機關ノ普通「ジヤ
 ンク」ニ一隻ノ容積大々三万斤ヨリ
 小々二千斤ニ搭載スルヲ得其容
 積ノ大ナルモノモ夏時ニ降セハ能ク
 濟甯川ニ抵ルヲ得ルト云フ而チ一々
 年間ノ航行船舶ハ大小合計約一千五
 百餘隻ニ上ルト稱セラル

△第三項 黃河

山東ニ於ケル黃河河道ハ古末變遷常
 ナク夏時山水ノ暴祭ト昔ニ河水汎溢
 シテ堤防シ破壊スル事屢々ナリシカ
 現今ノ河道ハ俗ニ新黃河ト稱スルモ
 ノニ對シ一ニ大清河ノ河道ニヨレリ曹
 州ノ境ヨリ東北流メ東平州ニ於テ運
 河ヲ貫キ平陰、歷城、利津、蒲台ノ各縣下

在芝罘日本領事館

シ貫流 滸 遂 = 渤海 = 入ル
 黄河、源ヲ西藏ノ「コ」ノルニ 奈シ支
 那本部、蒙古シ通シ長城シ横キル
 回再ヒ本部支那ニ入リ山東省シ東西
 = 貫流 滸 遂 = 海 = 入り延長ニ千三百
 哩 = 亘リ流域四十五方哩ノ廣キ =
 上ル東亞細亞洲有數ノ大河ナレ 凡河
 水黃濁年々増シ流ヨリ無量ノ滓泥シ流
 下 滸 河床シ埋メ汎濫ノ害古今ニ絶
 レ古末 纒 子ノ経世家シ 滸 治水ノ方法
 = 腦漿シ絞ラシメタルヲ知ラサルナ
 リ之シ以テ黃河、其流域ノ大ニ比シ
 其河勢ノ雄ニ較ヘ交通上ノ利便シ午
 フル一甚夕少ク汎濫ノ害ニ定ニ舟楫
 ノ利ニ千百倍スルヲ知ラサルナリ現
 = 同河、山東省シ東西ニ奔流一貫ス
 ルニ拘リラス 僅ニ春夏山水暴漲ノ際
 = 至リ河南陝西地方ヨリ 藥材桐油漆
 水烟 鉄器等ヲ搭載シタル船舶ノ航行
 シ見ルニ過キス而モ以テ等ノ船數ニ一
 年ヲキモニ三百隻ニ上ラス 黃河ヲ航
 行スル船舶、其形状概ノ扁平ニ 滸
 復ノ容積大ニ三千餘斤ヨリ小ニ五分
 百斤ニ搭載スルヲ得其多クハ船夫ノ
 手製ニ係ルモノトス 元來河南地方ニ
 於テハ木材ノ價格非常ニ低廉ナルカ

在芝罘日本領事館

伊

故ニ船夫自ラ手シ下リ扁子ニ幅廣
 キ一種筏梯ノモノヲ造リ之ニ貨物ヲ
 搭載シ河水ノ暴漲シ利用シ一回ノ航
 行シ為レ搭載貨物シ漕口其他ノ地
 陸揚シ完ルトモ其船隻ヲ燃料ト
 賣却シ徒歩歸郷スルモノ多シ蓋シ
 黄河ノ水勢急激ニ到底運河其他普
 通河川ヲ航駛スル構造ノ船舶ヲ使
 スルト困難ナルカ為ニ唯々堅牢ヲ主
 トレ斯卡ル特殊ノ船ヲ案出スルニ至
 レルモノナラハヘキモ之レトテ底急
 激ナル黄河ノ水勢ニ敵ハヌ航スル
 不可能ナルト將タ亦沿岸地方燃料ノ
 需用多ナル事情ニ遂ニ彼等ヲ新
 カル方法ニ出テシムル所以ナリト云
 フ又鄭城高唐地方ヨリ雜穀運搬ノ用ニ
 供スル船隻一々年約二百余隻ニ是又
 水運ヲ黄河ニ依ルモノニ其構造ハ
 扁子ニ形細長ク一隻ノ容積ハ三十石
 ヲリ五十石ニ及ブモノアリ
 黄河ヲ下ル船舶中漕口其他ノ地方ニ
 於テ賣却スルモノヲ除キ其他多クハ
 利津ヲ經テ渤海ニ出テ更ニ他地方ニ
 赴クヲ常トシ漕航ハ利津滄台兩縣ヨ
 リ漕口ニ抵塩ヲ搭載シタム塩船ノ
 在芝罘日本領事館

海 340

ニ^ハ從末稍々大形ノ船隻ノ湖江ノ浦
カサ^ルニ夏時河水漲大ノ降ヲ利用セ
ハ吾通港灣ニ於テ使用スルハ蒸汽船
ハ灣口迄上航スルハ必スシテ困難ニ
非サル可^レト云フ

在芝罘日本領事館

海 341

第三項陸運
第一項道路

山東省ハ各府縣及村落ヲ連絡スル
 大小數十條ノ道路アリテ如何ナル山
 間僻地ニ至ルモ其沿道ニハ五十清里
 乃至八十清里毎ニ即チ普通一日ノ行
 程ヲ隔テ、必ラズ亦宿宿ノ設アル道
 路宿驛ハ必ズ備ハガレニテ了カレド
 モ近年政府ニ於テ甚モ道路ノ修理ヲ
 イサガハルヲ以テ大抵ノ道路ハ荒廢ニ
 歸シ車道ノ如キハ降雨ノ期節ニ至レ
 バ忽チ沼澤ト化シ泥濘勝リ設スルニ
 至リ之ニ次ク乾燥ノ時期ニ至レバ
 車轍ノ凹凸甚クシテ旅人ノ行旅ニ一
 大不便ヲ感ゼシムカレバ普通山東内
 地ノ旅行ニハ騎馬、駝、或ハ管子ヲ用
 エルヲ常トシ中流以下ノモノハ驢馬
 若クハ一輪車ニ兼用スルモノ多シトス
 今當省ニ於ケル是等道路ノ重ナルモ
 一ノヲ託スレバ次ノ如シ

一 北京大道
 此大道ハ北京ヲ發シ山東省界ノ德
 州ニ至リテ東西ノ二道ニ分岐シ西
 道ハ正南ニ進ミ恩縣高唐ヲ經テ荏
 平ニ出テ黃河ヲ渡リ東南ニ向ヒ阿
 縣汶上縣鄒縣滕縣嶧縣等ヲ經過シ

在芝罘日本領事館

高

予江蘇省ノ徐州ニ達ス此道路ハ兗
 州迄ハ稍平坦ナレドモ地質概シテ
 沙泥ニシテ行旅甚ク困難ナリ有シ
 テ同地方ニ於ケル各府縣間ノ交通
 ハ頗繁ナリト云フヲ得カレドモ身
 公曲阜ノ孔子廟鄒縣ノ孟子廟及魯
 山等ニ参詣スルモノアリ春秋ノ
 二季ニハ人馬ノ往來絡繹ナリ又東
 道ハ德州ヨリ平原禹城齊河ヲ過ギ
 黄河ヲ東ニ横断シ山東ノ省城ナリ
 濟南ニ出テ夫レヨリ東南ニ轉ジ新
 泰蒙陰沂州ヲ通過シテ江蘇省ノ宿
 遷ニ多シ此道ハ黄河以南泰安迄ハ
 在芝罘日本領事館
 地勢次第ニ高ク終ニ山間ニ入り畿
 甸ノ坂路ヲ上下シテ伴城ニ出テ稍
 平地トナリ再ビ丘陵起伏ノ間ヲ經
 過シテ江蘇省ニ入ル
 一芝罘ヨリ濟南ニ通スル大道
 此道路ハ芝罘ヨリ西向シテ黃縣ニ
 至リ同地ニテ西南ニ折レ萊州沙河
 昌邑ノ各都邑ヲ通過シテ濰縣ニ至
 リ更ニ西進シテ昌樂長山鄒平章邱
 ヲ經テ濟南府ニ達ス芝罘黃縣ノ間
 ハ道路ノ高低一ナラズ甚ク險惡ナ
 ルモ北ヨリ西スルニ從ヒ幅員次
 第ニ拡大セリ亦道ハ山東省ニ於ケ

高

重要ノ道路ニシテ當省ノ西北部
 横ハル汝野ヲ貫通シ沿道到ル処
 各種ノ物産多ク民度モ亦殷富ニシ
 テ商業盛ナリノミナラズ芝罘ヨリ
 山東内地ニ貨物ヲ輸送スル唯一ノ
 陸上交通機關ナリヲ以テ近年中車馬
 ノ往來絶エムコトナシ
 芝罘ヨリ山東角ノ東端ニ通ル道路
 本道路ハ芝罘ヨリ寧海ニ至リ走レ
 ヲリ威海衛ヲ經過スル(海岸線)モノト
 文登縣ヲ經過スル(山道)モノトニ道
 芝罘ヨリ萊陽平度ヲ過ギ昌邑ニ通ス
 在芝罘日本領事館
 龍縣ヨリ壽光蒲台ヲ經テ武定ニ通
 ル道路
 萊州ヨリ平度ヲ經テ膠州ニ通ル
 道路
 龍縣ヨリ安邱高密膠州即墨ヲ經過
 シテ青嶋ニ通ル道路
 龍縣ヨリ安邱ニ至リ前記ノ青嶋道
 路ニ分レ莒州ニ通ル道路
 膠州ヨリ諸城莒州ヲ過ギ沂州ニ至
 リ北京大道ニ會合スル道路
 膠州ヨリ海岸ニ沿ヒ日嬰ヲ經テ江
 蘇省青口ニ通ル道路

高

344

一長山ヨリ周村、淄川、博山ヲ通過シテ
 泰安及兗州ニ於テ北京大道ヲ横ギ
 リ更ニ金郷城武ヲ經テ曹州ニ通ス
 ル道路
 一直隸及山東ノ境界ヨリ大運河ノ左
 岸又ハ右岸ヲ巡リ運河ト共ニ江蘇
 省ニ入ル道路
 一青州ヨリ臨朐、蒙陰、泗水、曲阜ヲ經テ
 兗州ニ通ズル道路
 一濟南ヨリ西向ニテ黃河ヲ渡リ荷河
 高唐ヲ經過シテ臨清ニ通ズル道路
 一濟南ヨリ荷河ニ至リ臨清行ノ道路
 ト分レ落平、東昌、莘縣、聊城ヲ過ギ觀
 城ニ通ズル道路
 一濟南ヨリ北進ニテ青島、濱州、利
 津ヲ經テ錢門関ニ通ズル道路
 一禹城ヨリ臨邑、德平ヲ經テ樂陵ニ通
 ズル道路
 一冠縣ヨリ棠邑、陽穀、范縣ヲ過ギ曹州
 ニ通ズル道路
 一山東鐵道
 一山東鐵道トハ青島ヲ起テ
 州、周村ヲ經テ山東省濟南府ニ達スル
 三、百四十哩ノ既成幹線及ニ張店、博
 山間三十九ノ既成支線並ニ

在芝罘日本領事館

海 345

膠州ヨリ沂州ヲ経テ濟南ニ至ル豫定
 南線及ビ濟南ヨリ直隸省界ノ德州ニ
 延長スル豫定線ヲ總称シテ山東鐵道
 ト云フ
 此鐵道ハ獨乙ノ經營ニ係リ去ル明治
 三十一年三月六日(光緒二十六年二月十四日)
 獨乙ト清國トノ間ニ締結ヒラレタル
 北京條約(膠州灣ノ租借鐵道礦山及放資ニ
 關スル條約)ニ基キ光緒二十六年山東委
 員蔭昌ト獨乙委員葉恩克トノ間ニ暫
 行章程二十八條ヲ訂結シ華德膠濟鐵
 路公司(所謂山東鐵道會社)ナルモノヲ設
 立シ起工後五年間ニ竣工ノ豫定ヲ以
 在芝罘日本領事館
 青島濟南間北部幹線並ニ張店博山
 間支線ノ建設ニ着手シ明治三十二年
 十月青島ニ於テヘンリ親王臨場ノ
 上盛大ナリ起工式ヲ舉行シ三十七年
 二月中線定期ヨリモ早ク其工事ヲ終
 り同年七月一日濟南ニ於テ全線ノ開
 通式ヲ行ヒ同日ヨリ其營業ヲ開始セ
 り日下毎日直通列車ノ發着各一回ア
 リテ午前六時十五分ニ青島濟南ノ西
 地ヲ發シ十二時間余ニシテ濟南青島
 ニ到着ス尚ホ此外全線路ヲ四區ニ分
 ケ各區毎ニ一日往復各一回ノ列車ヲ
 運轉セリ

高

海 346

山東鐵道會社ハ其營業期間中純益金
 ガ資本金ニ對シ五分以上七分未満ニ
 達セリトキハ其收益ノ二十分の一、
 七分以上八分未満ハ其十分の一、八分
 以上一分未満ハ其五分の一、一分以上
 一分未満ハ其三分の一、一分一分
 以上ニ達セリトキハ其二分の一、一
 清國政府ニ収ムルコトナシ
 該鐵道既成線ノ通過セル地域ハ當省
 中最多豐饒ノ田野ニシテ各種ノ產物
 ニ富ミ人民ノ購買力亦比較的長大ナ
 ル地方ナリ從來是等ノ地方ニ出入セ
 シ貨物ハ總テ芝罘ヲ經由セシモ膠州
 灣ノ開港ト共ニ山東鐵道工事ノ進捗
 スルニ連シ沿道ノ住民次第ニ鐵道ノ
 利便ヲ知得シ殊ニ同鐵道ノ濟南ニ開
 通シテヨリ此ヲ利用スルモノ日々増
 加ヲ乘スニ至リ多シバ是迄芝罘ヲ經
 由セシ貨物ニシテ近來鐵道ニヨリ青
 島ヨリ出入スルモノ漸次増進ノ傾向
 ヲ示シ隨テ該鐵道ノ収支相償ヲノ期
 モ恐ラクハ遠キ將來ニアラザルベシ
 昨ニヤハ年ニ於ケル同社營業ノ狀況
 ヲ見ルニ貨物ニ十萬三千七乗客七十
 九萬五千名ヲ輸送シテ十七年ニ比シ
 前者ハ六割九分後者ハ四割二分五厘

在芝罘日本領事館

高

海 347

増進セリ今同鉄道が昨年中ニ運搬
 其發送地ヲ記スルハ次ノ如シ

山東鐵道貨物輸送表

品名	單位	膠州及其附近		濰縣及其附近		濟南及其附近		合計
		數量	價格	數量	價格	數量	價格	
綿織物	担	3,000	600.00	2,000	400.00	1,000	200.00	6,000
毛織物	担	1,000	200.00	500	100.00	300	60.00	1,800
金銀類	担	50	10,000.00	30	6,000.00	20	4,000.00	100
鈕	担	100	1,000.00	50	500.00	30	300.00	180
漆料	担	10	1,000.00	5	500.00	3	300.00	18
燐寸	担	100	1,000.00	50	500.00	30	300.00	180
針	担	100	1,000.00	50	500.00	30	300.00	180
石油	担	100	1,000.00	50	500.00	30	300.00	180
家具	担	100	1,000.00	50	500.00	30	300.00	180
砂糖	担	100	1,000.00	50	500.00	30	300.00	180
酒類	担	100	1,000.00	50	500.00	30	300.00	180
各種雜貨	担	100	1,000.00	50	500.00	30	300.00	180
合計		10,000	1,000,000.00	5,000	500,000.00	3,000	300,000.00	18,000

在芝罘日本領事館

山東鐵道豫定南線ハ明治四十一年迄
 其要求權アルモノニシテ當省ノ東部
 及南部ニアル主要ノ各府縣ヲ貫通シ
 等辺ニ角形ノ二辺ヲセリ若シ此線
 路ニシテ布設セザルニ至ラハ山東
 省内ニ於テハ運輸ハ同鉄道會社ノ強

348

海

ンド獨占ニ歸スベキニ南線沿道ハ北
 線ト異ナリ概シテ土地確確ニシテ物
 産ニ乏シキヲ以テ建設後暫クノ間ハ
 到底相當ノ利潤ヲ見ルコト能ハズ
 ハシ次ニ濟南德州間ノ豫定線ハ時來
 敷設セラルルベキ津鎮鐵道ノ一部分ヲ
 ナスモノニシテ北京天津地方ト山東
 省間ニ於ケル交通ノ要路ニ當ルルガ
 故ニ時來最モ有望ノ線路ナルベク且
 ヲ該線ニシテ愈布設セラルルニ至ラ
 バ青嶋ノ貨物ハ濟南以西ニ其販路ヲ
 擴張スルト若シ東河ニテ河南地方
 至ル貨物ノ一部分ニ亦青嶋ヲ有
 在芝罘日本領事館

二津鎮鐵道
 此鐵道ハ明治三十三年五月(光緒二十九年四月)清國政府ト「ガク」ケツエド、ケ
 ヤクニリスゴリホシロシヨシニ及德華銀行トノ
 間ニ締結セラシタル豫定條約ニヨリ
 天津ヨリ嶧縣迄ハ獨乙ニ於テ五ヲ建
 設ニ嶧縣ヨリ鎮江迄ハ英國ノ手ニヨ

津鎮鐵道ハ天津ヲ起矣トシ山東省ノ
 德州濟南兗州縣ヲ經テ江蘇省ノ清江浦
 ヲ過ギ揚子江畔ノ鎮江ニ達スル線路
 ニシテ其延長チ八百餘浬(九百八十
 ニキロメートル)トス

高

369

津鎮鐵路
山東省
張家口

四十五万兩ヲ英獨シシテ
 款ニ利率五方償還期限ヲ五十年ト定
 ノ該鐵道ヲ担保トセリ其後終真ヲ南
 京ノ對岸ニマシテ浦口ニ變更シ資本金
 一千万兩ニ増加シ其内六百五十万
 兩ハ獨ニヨリ辦シ残りノ三百五十万
 兩ハ英國ヨリ出資スルコトニ確定セ
 リト云フ此鐵道ハ己ニ大體ノ測量ヲ
 了リ最後ノ許可ヲ得ルノミトナシ
 然レハ近頃傳フル所ニヨリ北京在
 住ノ山東出身ノ官吏等ハ該鐵道ヲ清
 國ノ手ニテ布設セシトテ頻リニ契約
 ノ變更ヲ運動シ居シトノコトナレド
 英獨殊ニ獨ニハ容易ニセズ肯セザ
 ルベシ
 津鎮鐵道ノ他省ニ及ボル影響ニ付テ
 ハ暫クモ之ヲ措キ當山東省ノミニ付テ
 之ヲ見ルニ若シ該鐵道ニシテ落成ス
 ルニ至ラバ徑來運河ヲ利用シ又ハ馬
 背ニヨリテ南方ヨリ當省ノ南部並ニ
 西南部ニ流入セシ貨物ノ多クハ今後
 同鐵道ニヨリテ輸送セラルルト共ニ
 南方ヨリスル貨物ハ益々其販路ヲ擴
 張スベク又山東直隸ノ境ヨリ黃河ニ
 至ル一帶ノ地方ニ於テ使用セラルル

在芝罘日本領事館

海 93-0

綿糸綿石物燐寸砂糖其他各種日用品
 大部分は此鐵路ヲ經テ天津ヨリ分
 配セラルルニ至ラレテ天津ハ將
 來各方面ヨリ蠟集ムル交通機關ノ中
 心トシテ同時ニ其附近ハ各開港場ニ
 屬スル貿易園ノ接觸地域トナルベシ
 即チ芝罘ハ小清河ニヨリ青嶋ハ山東
 鐵道ニヨリ天津及鎮江ハ津鎮鐵道ヲ
 利用シテ各其貿易範圍ヲ擴張シ前記
 ノ各方面ヨリ聚集スル貨物ハ濟南附
 近ニ於テ互ニ相角逐スルニ至ラレ
 三黃河小清河聯絡鐵道
 此鐵道ハ黃河ト小清河トヲ聯絡スル
 在芝罘日本領事館
 夕ノ小清河ノ上流ニテハ黃台橋ト黃
 河畔ノ梁口間ニ敷設スルモノニシテ
 其延長ハ二哩ニ過ギズ獨乙ハ山東鐵
 道ノ鮮營上ニシテ敷設スル小清河ノ
 輸送ヲ支配セント欲シ膠州灣總督ヲ
 三ヲ屢々同鐵道ノ布設權ヲ山東鐵道
 會社ニ許與セラルレシトシテ山東巡撫
 ニ迫リテシドモ巡撫ハ断然之ヲ拒絶
 三同省高勢局ノ争ニ於テ之ヲ敷設ス
 ルコトトナシ且ニ要スル資本金ハ十
 万兩ニシテ其半額以上ハ己ニ募集セ
 三シテヨリトノコトナレバ遠カラズ其
 工争ニ着手セラルルニ至ルベシ

高